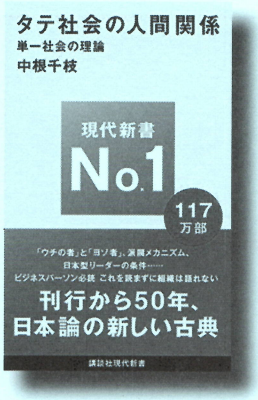
学生に読ませたい本

柴田　直子



『タテ社会の人間関係』

中根千枝　著

社会人類学者である中根千枝氏が昨年10月に亡くなった。中根氏による本書を人に勧められて読んだのは大学生の時であったが、日本社会の構造がインドのカースト制度をはじめ、中国・欧米の社会制度や慣習と比較されながら理論的に分析されていく様に鳥肌の立ったことを覚えている。

本書の中心は、「場」と「資格」という「２つの原理」が「一定の個人からなる社会集団の構成の要因」を設定しているとする部分であろう。「資格による集団構成」は、一定の個人を他から区別しうる何らかの属性という基準――例えば「氏・素性」、「学歴・地位・職業」、「資本家・労働者」――によって構成され、「場による集団構成」は、一定の枠――「一定の地域」や「所属機関」――によって構成される。さらに本書は、日本社会の特徴は後者であるとし、この「場」によって構成された集団においては、「ヨコ」の関係――同質・同資格の繋がり――よりも、「タテ」の関係――年齢、入社年次による序列――が強調されるという。

本書の中で示される分析は、例えば、近年雇用システムの領域で用いられる、「ジョブ型雇用」・「メンバーシップ型雇用」の理論の根底にあるものを説明することができるであろう。刊行から50年以上も経つ現在においても通用する理論に、今の大学生の皆さんにも鳥肌を経験していただきたい。

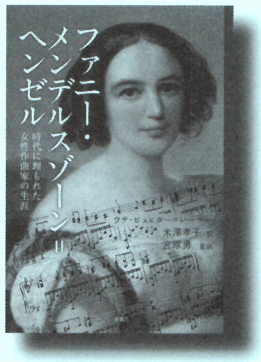
―*―

『ファニー・メンデルスゾーン＝ヘンゼル ―― 時代に埋もれた女性作曲家の生涯』

ウテ・ビュヒター＝レーマー　著／　米沢孝子　訳／　宮原勇　監訳（春風社・2015）

新型コロナ・ウィルス蔓延防止のためのロックダウン中、何十年かぶりにピアノを弾くようになった。最初に弾いてみたのが、フェリックス・メンデルスゾーンの小曲である。

小学生の時に発表会で弾いたこの曲を覚えていた理由の１つは、短調がちでメランコリックなこの曲の調べが、「大好きだけど、なんか、メンデルスゾーンっぽくない」ことが、当時よりずっと引っかかっていたからである。そしてもう１つは、随分大人になったある日、特に有名でもないこの曲をたまたまテレビ番組のBGMとして耳にしたからである。その番組は、フェリックスの姉のファニー・メンデルスゾーンの生涯を扱ったものであった。



番組の中では、「当時、女性が作曲家として社会に出ることはとても難しかった」こと、「ファニーの作品のうちのいくつかが、弟フェリックスの作品として公表された」ことが語られていた。

「もしかして、この曲・・・。」突然、疑惑のようなものが湧きあがり、どうしても確認したくて、思わずオンライン・ショップでこの本を買ってしまった。

本書は、手紙の中の彼女自身の言葉を引用しつつ、彼女のあふれる音楽的才能――弟フェリックスとともに受けた英才教育、豊かな交友関係――と、その生き方――時代故、裕福な家庭の娘として生まれたが故の不自由さ、特に音楽活動に対する父親と弟フェリックスによる反対、そして理解者たち、特に画家である夫の協力――を生き生きと描くとともに、彼女の音楽の特徴を分析している。

今回、この本からは疑惑への答えを見つけることはできなかったが、著者によると彼女をはじめとする女性作曲家に関する研究は始まったばかりだという。実は、本書を手がかりに彼女の楽譜も探し出したが、彼女のピアノ曲は、鬱々とした中に、半音階や病みつきになりそうな不協和音から成る深くて美しい旋律を含み――本書のいうところの「後期ロマン派を先取りした和声の音楽的考え方」がこれなのか――彼女への興味は広がるばかりである。謎解きは謎解きとして、長く縁のなかった音楽への関心を呼び起こしてくれた一冊であった。　（法学部教授）